

Project	地域教育専攻
38	幼児の遊びの中の「学び」の発見プロジェクト

メンバー	[学 生] 國門 美緒 / 渡邊 実夏 / 米澤 璃 / 上野 永遠 [担当教員] 本田 真大
------	--

【背景】

幼小接続に関して、幼稚園教育要領において「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」(以下、**10の姿**)が記載され、小学校学習指導要領には10の姿を踏まえた指導について記載されている。実際に日本全体で保育所・幼稚園・認定こども園から小学校への円滑な接続の難しさ(小1プロブレム)、地域(実践園)ではコロナ禍の影響も重なり異年齢交流の機会が限られていることが課題となっている。

【目的】

本プロジェクトでは幼児の異年齢集団を対象に、「主体的・対話的で深い学び」としての遊びの時間を提供し、円滑な幼小接続のための10の姿の育ちを支えることを目的とする。

【概要】

実践は学校臨床・子育て支援研究室による、主に乳幼児を対象とした地域での実践活動である「あそびっこだいさくせん」で行われた。本プロジェクトは北海道教育大学附属函館幼稚園の預かり保育で月1回(14:30-15:30)行われる活動の一部で実践した。なお、**10の姿**とは「**健康な心と体**」「**自立心**」「**協同性**」「**道徳性・規範意識の芽生え**」「**社会生活との関わり**」「**思考力の芽生え**」「**自然との関わり・生命尊重**」「**数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚**」「**言葉による伝え合い**」「**豊かな感性と表現**」のことであり、**主体的・対話的で深い学びとしての遊び**を通して伸びていく資質・能力(「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」)の具体的な姿を示すものである。今年度は過去の同プロジェクトで関連が見られにくかった、「**数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚**」に関わる活動を考え、実践した。

【プロセスと成果】

前期は調査1-3と実践1-5、後期は調査4と実践6-7を行った。すべての実践で「異年齢同士の関わりを楽しむこと」をねらいとし、各実践でテーマ(数量、図形、標識、文字)に即した個別のねらいを設定した。

1. 第3回あそびっこだいさくせん(6/15) 22名参加(年少組2名、年中組7名、年長組13名)

数量の感覚をテーマに「重さに対する感覚を働かせて、重さの違いを予想したり、比べたり、関連付けたりすることを楽しむ」ことをねらいとし、絵本の読み聞かせ、秤を使った動物の重さ比べ、動物を使った魚釣りとお水族館づくりを行った。活動では自分たちなりに重さを予想しながら動物の重さを比べたり、動物と魚の両方を組み合わせて様々な重さを比べたりしていた(数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)。また、秤の扱い方や順番に使うこと等のきまりが幼児間で共有されていた(道徳性・規範意識の芽生え)。

2. 第7回あそびっこだいさくせん(11/16) 21名参加(年少組3名、年中組8名、年長組10名)

標識をテーマに「標識の役割を理解し、進んで遊びに取り入れようとする」ことをねらいとし、迷路の中に12種類の看板を置いてコースを変えながら遊んだ。活動では、自分たちで標識の意味(矢印の方向に進む、動物の真似をする、等)を理解してそれに従って行動し、ゴールするためにどの方向に進むべきかを判断している姿が見られた(数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)。標識が自分の身の回りにもあることを意識して迷路をする様子も見られた(社会生活との関わり)。また、迷路の先にある標識を見てどこに進めばゴールに近づけるのかを考え、見通しを持ちながら全身を楽しく動かしていた(健康な心と体)。



【実践 4: 動物重さ比べ】



【実践 7: ドキドキ看板迷路】

【総括と反省・今後の課題】

1. 前期の活動の評価

本来の活動のねらいからずれた行動が見られたため、幼児の集中力に合った活動を考え、新型コロナウイルス感染症対策を行いながら幼児の興味関心を引き出せるような活動が必要であった。子ども達自身で遊びを継続・発展できる題材を考えることで**数量や図形、標識や文字への関心・感覚**をその場限りのものにしないようにしたい。さらに異年齢間の交流が強くは見られていないため、遊びの中で交流のタイミングを設けられるような活動を考えて行きたい。

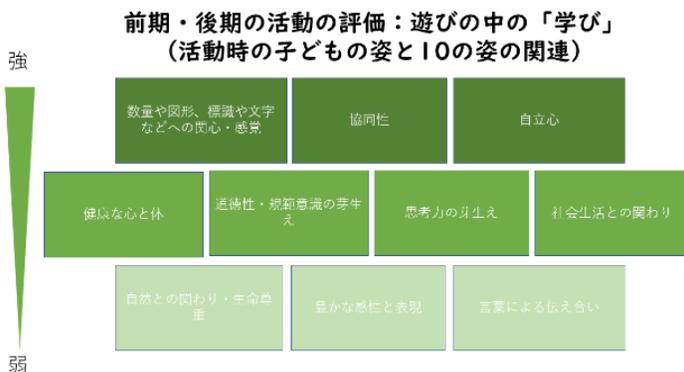
2. 後期の活動の評価

異年齢でチーム編成を実践した結果、前期よりも異年齢間の交流が多く見られた。一方で、**社会生活との関わり、自然との関わり・生命尊重、豊かな感性と表現**はあまり見られなかった。活動を通して、主な目的である**数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚**に沿った活動ができているように感じた。活動ごとの反省で次回への課題を見つけることによってプロジェクトをさらに効果的なものにすることができた。

3. プロジェクト全体の評価

毎回の活動から**10の姿**との関連を読み取ることができ、活動全体を通してすべての**10の姿**を見取ることができたことにより、「あそびっこだいさくせん」を通して**10の姿**の育ちを支えるという目的に概ね貢献できたと思われる。

今後の課題として、次年度は今年の**10の姿**の中で強くは見られなかった「**豊かな感性と表現**」に着目し、活動を行っていきたい。



【地域からの評価】

1. 実践園からの評価(要約)

「動物重さ比べ」では天秤が工夫されていて、バランスを取るのが難しかったが、次第に天秤の仕組みを理解して使い方に馴染んでいった。ペットボトルの水の量で重さを調整し、動物の絵を重さの目安にしてあり、幼児たちは最後まで集中して活動していた。

「ドキドキ看板迷路」では、通り道を理解して看板(標識)の指示通りに止まる、踊る、動物の真似をするなどの動きを楽しんでいた。年少(3歳)児も自分のペースで迷路を楽しむことができていた。一方で迷路の隙間を通り抜ける子もあり、幼児一人ひとりの違いがみられ、また理解力が培われている様子を確認できる活動であった。

2. 発表会時の評価(コメントレポートの一部を要約)

幼小接続や幼児期の終わりまでに育てほしい姿(10の姿)の観点から、幼児が興味をもって楽しく遊ぶ中で学んでいく様子がわかった。

10の姿の観点から活動の計画と評価が行われており、活動の中で何を目的にどんなことを行ったのか、結果をどう評価したのかが分かりやすかった。

【年間スケジュール】

4月	実践1 遊びの理解と評価
5月	実践2 模擬保育体験
	調査1 実践園の実態把握
	調査2 実践経験者への聴き取り
6月	実践3 幼児との交流
	実践4 あそびっこだいさくせん 動物重さ比べ(テーマ:数量)
7月	実践5 あそびっこだいさくせん わくわく町づくり(テーマ:図形)
8月	調査3 年長児の実態把握
	実践6 あそびっこだいさくせん ひらがな探し(テーマ:文字)
10月	調査4 園児の実態把握
11月	実践7 あそびっこだいさくせん ドキドキ看板迷路(テーマ:標識)
12月	活動のまとめ
1月	報告書作成

【関連するプロジェクト】

- ・2018年度 D-07 ・2019年度 D-57(42)
- ・2020年度 D-06(37) ・2021年度 D-04(38)

